

## 異文化における日本美術の発信 —シアトルアジア美術館の場合

シャオチン・ウー

シアトル美術館 日本・韓国美術担当学芸員、アメリカ



### 略歴

米国・プリンストン大学より博士号（日本美術史）を取得。現在はシアトル美術館で日本・韓国美術担当学芸員として、同館の名高い日本と韓国美術の館蔵品を監督している。数々の展覧会を手掛けてきたが、近年は2020年2月に再開館した同館の2年に及ぶ全面改修に力を注いできた。2019年、これまでの業務が日本の文化芸術の促進に寄与したとして中曽根平和研究所より中曽根康弘賞を受賞。

### 発表内容

シアトルアジア美術館は、シアトル美術館の原点であり、現在は3か所にあるシアトル美術館のうちの一つで、2年間の改修工事を経て2020年2月に再開館した。建築家が1933年のアールデコ様式の要素を維持しつつ建物を更新しようと尽力する一方、学芸員も同様の疑問を掘り下げて考えた。21世紀にふさわしいアジア美術の物語をいかに新たに概念化すべきか、我々は、国内の同僚や地域の人々と何度も討議を重ねたうえで、アジアの歴史、地理、人々の複雑さを尊重し、一般化しすぎることなくアジア文化のつながりを強調すべきだと決定した。この目標を念頭に、館蔵品展示室では比較文化的テーマによるアプローチをとった。各展示室はアジア各地の文化財を比較対照できるよう多くはグループを作って、アジアの文化と伝統のテーマごとに構成した。そうすることで、地理的・時代的な区分をなくしたのである。美術館の展示室は、左右対称の構成になっており、このような空間の特性を踏まえて、南側は宗教美術、北側は世俗的世界を中心に展示するという大枠を決めた。

### 馴染みの名作の文脈化

シアトルアジア美術館の日本美術作品数は約3400点で、量的にはそれほど多くはないが、さまざまな時代や媒体から、多数の名作が含まれている。これらの名作は、様々な展覧会で展示され、日本美術の歴史をその文化的背景から紹介してきた。今回の発表では、これらの名作が「アジア美術」という、より幅広い文脈の中でどのように提示されているかについて共有する。

「スピリチュアルな旅」と題された展示室では、ヒンズー教、イスラム教、仏教、神道など、アジアの宗教美術の作品展示を通して、アジアの宗教美術の多様性を示している。しかし、この展

展示室は宗教ごとに構成されているのではなく、守護者や案内人、天国や地獄といった共通のテーマで展示されている。釈迦の生涯を描く作品のコーナーもある。中国、日本、韓国、インド、タイから集められた石、金属、象牙などの彫刻群は、釈迦の生涯の場面を描写する。聖徳太子の伝記は、釈迦の伝記と多くの類似点があるので、このコーナーでは2歳の聖徳太子像も展示される。このコーナーに聖徳太子を置くことで、来館者は日本仏教における聖徳太子の重要な役割が理解できるようになる。



Boundless: Stories of Asian Art(2020年)の展示風景  
(シアトルアジア美術館)

「テキストとイメージ」はアジア美術の大きなテーマであることから、このテーマに沿って2つの展示室を構成した。南側の展示室では、宗教美術におけるテキストとイメージの相互作用を、北側の展示室では、東アジアやイスラム世界で最も高く評価されている「詩」「書」「画」の芸術に焦点を当てる。北側の展示室では、日本、中国、韓国、イスラムの書が近接して展示されており、書のスタイルの幅広さを実感できる。この展示室の中央には、シアトル美術館のコレクションでも特に人気の高い俵屋宗達と本阿弥光悦の合作、「鹿下絵新古今集和歌巻断簡」がある。宗達の鹿が、光悦の流麗な散文書法で書かれた勅撰集『新古今和歌集』の和歌とともに描かれており、「詩」「書」「画」というアジアの三大芸術を見事に表現している。

「自然界を描く」と題された展示室には、日本画家である都路華香の屏風が展示されており、この屏風は、華香自身の言葉で「海や波のように純粹で無限の心境」を表現している。水平線が異様に高く配置されているため、遠くから見ると特別な視覚的後退感がある。戸口から画面に近づくと、波によって画面の中に引き込まれるような感覚を覚えるだろう。この日本画の屏風が視覚的に非常に魅力的であることは間違いないが、アメリカの観客に日本画とは何かを説明するのは簡単ではない。直訳すれば「日本の絵画」だが、それだけでは何も分からず、中国と日本の文人画（与謝蕪村の作品）を対比的に並べてみることで、日本画の特徴が際立ってくる。色彩、構図、筆致、質感、明暗の効果など、すべてが伝統的な山水画から離れていることがわかる。つまり、このような比較は、一般の来館者にとって日本画とは何かを明らかにする。

### 作品解釈のためのデジタル技術

デジタル技術を駆使して、スマートフォンによるツアーや展示内にインタラクティブな要素を作ることで、作品を解釈するためのデジタルコンテンツを増やすことができた。例えば、シアトルの観客は、「埴輪 挂甲の武人」の個性的な外観と、その機能の謎を気に入っている。この作品の美術史的な情報は、ケース内の簡潔なキャプションに記載されているが、キャプションのスペース以上に伝えたい情報がある。来館者は、この埴輪がどのようにシアトルアジア美術館に収蔵されたのかに関心があるので、このような背景となる情報をスマートフォンツアーに加えた。QR

コードを読み取ると、収集に関するウェブページで、シアトル美術館の創設者リチャード・フラー氏が東京国立博物館の「埴輪 挂甲の武人」を入手するきっかけとなった話が紹介される。

「神・仏の像」という展示室には、印相についてのコーナーがある。印相はヒンドゥー教や仏教の像の意味を理解するために不可欠なものであるが、印相の意味ややり方をひと言で説明するのは簡単ではない。そこで、来館者が印相を合わせ、その意味を理解できるインタラクティブなソフトを作成した。このような能動的な学びは、日本やアジアの美術全般について深い知識はなくても、熱心に学びたいと思っている来館者には効果的である。

## 「アジアの美術」の進化

「アジアの美術」という概念は常に進化しており、展示室では前近代の作品を中心に紹介しているが、過去と現在をつなぐために、あえて現代の作品もいくつか加えた。また、アメリカの美術館における「アジアの美術」の幅を拡げるために、展示室にアジア系アメリカ人の作品を取り入れようとしている。開館記念展では、中央の部屋に日系3世で、中国系アメリカ人の作家であるツタカワ氏によるサイト・スペシフィック・アートの作品を設置した。この、ハッシュタグや日本の縞によく見られる格子の模様をした光の天蓋のような作品は、当館の前にある、同じく日系アメリカ人作家であるイサム・ノグチが制作した「黒い太陽」と視覚的、暗喩的につながっている。

# トークセッション1

シャオチン・ウー

後藤 恒（福岡市美術館 主任学芸主事、日本）

後藤（以下 G）：発表をとっても興味深く聞かせていただきました。アジア美術とは何かという大きなテーマを、とにかく豊富で多様な貴館のコレクションを使って、とても斬新な切り口で面白く紹介しておられるのを聞いて、聞くほどに、とてもわくわくいたしました。貴館のアジア美術のコレクションというのは、10年ほど前になりますが、「美しきアジアの玉手箱 シアトル美術館所蔵 日本・東洋美術名品展」の際に当館にも来ていただきました。この時、光栄にも私も担当をさせていただきました。本当に素晴らしい作品の数々で、日本人から見ても、こんなものがあつたんだという驚きがあり、とても高い評価を受けた展覧会として当館の歴史の中でも大きく残っています。ご発表の中で、その時に見て感動した作品が色々な文脈の中に置かれている様子を見て、写真を見ているだけでも、また新しい魅力、輝きを放っているのだなということが分かってくるような気がしております。つくづく作品というものは展示によって、意味付けによって、右と左に置く作品との関係で見え方が大きく変わってくるということをあらためて感じた次第です。

最初の質問は、たくさんの展示室にそれぞれ新しい切り口を、テーマを設定されておられますけれども、そのテーマというのをどのように決めていかれたのかということです。これは当館で

も、貴館のように地域や時代を超えたテーマ設定をしたくていろいろ工夫してみるのですが、なかなか難しいと感じております。貴館のコレクションから考えて、こういうテーマができるかなというふうに組み立てていったらできたテーマなのか、あるいは先にアジア美術とは何かというテーマがあって、テーマを決めてからその中に豊富なコレクションの作品を当てはめていったのか、あるいはどちらでもないのか。その辺りの詳しい経緯のようなものを教えていただければと思います。

シャオチン(以下 X)：展示室のテーマの設定については、アメリカの学芸員たちからも質問されました。簡潔に言うと、所蔵品の内容と、学芸員同士のアイデアのやりとりを通して展示を決めました。最初は3人のアジア美術担当学芸員が所蔵品の中の代表的な作品を選んで、一点一点、画像をプリントアウトしました。それは何百枚にもなりました。それと同時にアジア美術の中心的なテーマを考えて、テーマのリストのようなものをつくりました。その後は、今回のリニューアルの前なので空いていた、一番大きな展示室の壁にテーマを書いて、作品の画像を貼って、それらの作品の共通点を考えながら、作品をこっちのテーマからあっちのテーマに移したり、テーマを作品によって変えたり、そして同時に全体的な流れも考えながら、まるで3Dパズルを組み立てるように各展示室を企画しました。今、いわゆる常設展の13室に展示されている作品は全部で約380点ありますが、最初選んだものの3分の2くらいです。テーマに関しても結局入りきらなかったものも結構ありました。

G：約380点ということですが、当館の展示室は古美術と近現代で2つ大きく分かれていますので、全部合わせたら約300点ですので、とても参考になりました。やはり主要な作品を1点選んで、それに、そこから語られそうなテーマをいろいろたくさんリストアップして作品を当てはめていって、今度は空間に当てはめていろいろ調整していくということですね。

X：結構長いプロセスでした。

G：本当に想像するだけで、相当なご苦勞をなさったのではないかと思いました。ありがとうございました。

次に、いわゆる常設展示で、そのような挑戦的なテーマを構成するということは、ある意味すごいことだと思うのですが、来館者に、それを見ていただく順番、いわゆる順路をある程度決めてご案内されているのでしょうか。それとも自由に、どこの部屋からでも見てくださいというようにご案内されているのでしょうか。

X：確かに日本では順路案内が曖昧ですと来館者はルートがよく分からない、となりますよね。アメリカでは順路案内があってもルート通りに観覧する人は少ないのです。今、新型コロナウイルスの対策の一つとして、スーパーなどにルートの案内があって、一方通行(One Direction)の案内を明らかに示しているのに、買い物客はほとんど無視しています。当館では、展示室の入り口

は少なくとも5つあります。やはり個人でルートを決めてもらうわけです。その流れも、この展示を企画した時に考えた要素の一つでした。つまり各展示室はテーマ別なので、どの入り口から入ってもよいのです。

G: それでは、発表の中での順番というのは、特にこの順番で見てほしいという希望があるわけでもなく、もうどこから見ていただいてもいいということなのですね。来館者は、全部を見る必要もないし、今日はここを見ていこうとか、次来た時はこの辺を見ようとか、そういうことが自由に選べるわけですね。

X: 全くそのとおりです。

G: 当館では全く違う状況で、古美術の部屋と近現代の部屋があるので、やはりお客さまが来られたら「どちらから見たらいいのですか」とか「どの順番で」ということを聞かれます。もちろん「どこから見てもいい」とはご案内するのですが、ある程度、順番というものを決めております。ただ、今、国立博物館では、いつ来ても、どの部屋からでも見られるような空間というものができてきていますので、その辺り、どうすればこういう自由な鑑賞の環境というものができるといふことを当館でも考えていきたいなと思いました。

次の質問ですけれども、展示替えについてです。古美術作品ですので、どうしても作品の保存の観点から定期的な展示替えが必要になると思うのですが、このように決められたテーマの中で、どのように展示替えをしていくのか。例えば俵屋宗達と本阿弥光悦の「鹿下絵新古今集和歌巻断簡」ですが、巻き替えで対応できるとしても、例えばそれを撤収した時に代わる作品というのがやはりなかなか難しいと思うのですが、その辺りの展示替えの計画というのは、どのように組んでいращるのか教えていただければと思います。

X: 当館も他のアメリカの美術館と同じように、原則として掛軸とか絵巻とかのような脆弱な作品は6カ月くらい展示して、その後は2~3年以上、休ませることになっています。確かに展示替えが必要で、今私たちは次の展示替えの準備中です。例えば、「鹿下絵新古今集和歌巻断簡」は「イメージと言葉 (Image and Word)」という展示室にありますから、やはり次の展示も和歌や絵と書の関係を示すことができるような作品が必要です。今後は、おそらくですが、源氏物語の絵巻を代わりに展示する予定です。それも、最初の展示の企画のようにいろいろなやりとりがあって、3人の学芸員が相談して、次はどのような作品をそこに展示するかということ相談します。

G: ではもう企画の段階で、最初からある程度、このテーマであれば無理なく作品を入れ替えながらもテーマを維持して展示ができるという計画があるわけですね。素晴らしいですね。

X: 一つの展示室では、宗教的な書と物語の関係を考えました。その展示室には、あまり展示替えできる作品がないので、おそらく、展示替えを2回した後、別のテーマに変わります。

G：収蔵庫にある作品が1点でも多く展示室に出るように活用するとなると、やはり場合によっては、そういう新しいテーマに入れ替えて、また新しいどこかの部屋を別のテーマにしてということも想定してらっしゃるわけですね。

最後になりますが、新型コロナウイルスの影響が今回のメインテーマにもなっているのですが、当館は新型コロナウイルスが流行し始めた際、2カ月くらいは閉館したのですが、その後は、いろいろ対策をしながら開館しています。今のところあまり大きな影響というか、特に大きな混乱はないのですが、展覧会を主催する立場としては、お客様には、自分が企画した展覧会をたくさん見に来てほしいけど、あまりたくさん来られたらやはり困るという、そのような葛藤があります。貴館では、リニューアルを終えて開館されて、すぐまた閉まってしまったということなのですが、これからの見通しとといいますか、再開館した後、どのような対策をしようとかいうことは検討されているのでしょうか。

X：リニューアルが昨年2月に終わって、やっと開館しました。大勢の人が来館してくれて、本当に重要な時期でした。でも3月からずっと閉館しており、今は、いつまた開館できるのか、まだ分かっていません。

G：まだ見通しは全く立ってないということでしょうか。

X：多分、早くても4月くらいですね。ワシントン州の州知事から今春いっぱい美術館も動物園も全部閉めるように指示があり、その後の見通しは、おそらく1日あたり200~300人ぐらいの入場制限を設けて、常設展示室も、これからの企画展も、できるだけあまり混雑しないような空間をつくっていくという考え方で、今、これからの企画展を準備しています。

G：そうですね。まずは暖かくなって、新型コロナウイルスが少しでも収束してからということですね。私も、もう今すぐにでも見に行きたいぐらいに楽しみにしておりますので、無事にまた開館されて、賑わいを取り戻していただくことを願っております。

X：ありがとうございました。

G：非常に私も親近感を感じている美術館ですので、これからもいろいろと情報交換、意見交換をしながらお付き合いいただければと思います。よろしくお願いします。

X：よろしくお願いします。